本多健一　著

『京都の神社と祭り―千年都市における歴史と空間』

中央公論新社　2015年10月　256頁　880円＋税

京都の神社およびその祭りとして，真っ先に私たちの脳裏に浮かぶのは八坂神社の夏の祇園祭であるが，他の諸社やその祭りの特徴は，と問われると，祇園祭における疫病退散の祈願を込めた山鉾巡行の鮮烈なイメージに覆われてしまって存外答えられない。京都市中における祭りの実態とその多様性，および各社とその祭りが遂げてきた歴史的変遷が，新書という限られた頁数の中にあっても，本書では平明に浮き彫りにされている。

あとがきから，本多健一氏の前著である『中近世京都の祭礼と空間構造―御霊祭・今宮祭・六斎念仏―』を土台としながら，立命館大学での講義録をもとに書き下ろされたのが本書であると判り，京都の地で学ぶ方々へ向けての著者の堅実な講義の様子が目に浮かぶようである。また，河内将芳氏らの先行研究をもとに，本書の表題からも不可避の題材である祇園祭についても論考を加えている。評者は，著者と同じく歴史地理学に立脚し，中近世という長いスパンのなかでの地方城下町の祭礼内容とその担い手の変化を明らかにし，それによって各城下町の構成員の変化やその地域的差異を明らかにする研究を進めている。中世随一の都市，京都における祭礼内容とその担い手の変化についての研究は，評者にとっても避けては通れないにもかかわらず，日本史学，芸能史などの層の厚い研究史の前にたちすくみ，怠ってきた。自らが本書を通して学ばせていただくためにも，本書評を評者が行うことをご海容いただきたい。

本書の構成は以下のとおりである。

第１章　京都を代表する神社・祭と都市の祭礼
第２章　平安京以前の古い信仰と神社―下鴨・上賀茂・松尾・稲荷
第３章　都市・平安京に生まれた新しい信仰と神社―八坂（祇園）・北野・上下御霊・今宮など
第４章　平安後期以降に生じた地域の守り神への信仰
第５章　平安京以前から続く祭―葵祭と御蔭祭・御阿礼神事
第６章　平安京の都市構造と結びついた祭―松尾祭と稲荷祭
第７章　平安後期から鎌倉期の祭―祇園祭の神輿渡御と今宮祭を中心に
第８章　南北朝期から室町期の祭―祇園祭の山鉾巡行を中心に
第９章　戦国期から安土桃山期の祭―剣鉾を生んだ御霊祭を中心に
終　章　近世から近代，そして現代へ

本書では，古都京都の市内で登録されている約300社の神社のなかから，代表的な９つの神社（下鴨・上賀茂・松尾・稲荷・八坂（祇園）・北野・上御霊・下御霊・今宮）とその祭礼をとりあげて，歴史や特徴などが考察されている。京都市中における祭りの実態とその多様性，そしてそれらの歴史的変遷についてわかりやすく明らかにされた著作がこれまでなかったことからも，本書の意義は大きい。

以下各章の内容紹介を行った後，評者からみた課題を整理することにしたい。

第１章では，京都を代表する神社を選択するために設定した２つの基準を表明している。１つは「その歴史が平安期ないしそれ以前にさかのぼり，現代まで維持・継承されている」こと，２つ目は，「多くの京都住民に信仰され，支えられてきているということ」である。

地域の守り神として信仰する人々（氏子），そして彼らが居住する地域（氏子区域）に着目し，各神社の氏子区域が現在，どのような実態になっているのかを図示し，京都の神社が「多くの京都住民に支えられてきているのかがよく理解できる」（３頁）とする。

平安期，ないしはそれ以前に創建がさかのぼれる神社の所在地を図示した上で，「どうして平安京という都市内部には，長い年月にわたって多くの京都住民の信仰を集めてきた主要神社がないのであろうか」との問いかけに始まる第２章，およびそれと対応関係にある第３章は，評者にとって学ぶべき点が多かったところの一つである。

平安京造営以前からある下鴨・上賀茂・松尾・稲荷の各神社については，それぞれの神々は神体山を中心とする自然と結びついていたという共通

点があった。

「奈良時代のころまで，神とは，普段は人里離れた土地に住むものと考えられ，険しい山や海中の嶋，深い森，巨大な岩などが神の住まいないし神の依り代，あるいは神そのものとして崇拝された。（中略）多くの場合，農耕の節目，例えば田植えや稲刈りの時期にのみ人里を訪れて人々のもてなしや祈願を受け，豊稔や繁栄を約束して帰っていくものであった。これが祭という行事の原初的な形態」（23-24頁）であったとする。

さらに，「古い神々には自然環境が不可欠で」あり，「自然と結びついている以上，その自然環境を穢すと祟るような神でもあった。（中略）したがって，古代の都城内部には，古い神々を祀る神社がないと考えられる」（24頁）。現代の環境問題にも結びつく，開発と保全のせめぎ合いが，8世紀末の京都においても展開していたことが興味深い。

平安京造営以前からある各神社については，もう一つ共通した性格があり，それは，古代の氏族が自分たち一族の氏神を祀っていた神社ということである。例えば，賀茂氏の氏神が賀茂社であり，秦氏の氏神が松尾社であり，「中世前期（鎌倉～南北朝期）までの氏神という言葉には，確かに血縁的集団の神という意味が含まれていた」（28頁）と指摘する。

第3章では，対して，平安京における都市生活のなかから生じてきた御霊信仰ないし天王信仰に基づいて祀られた新しい神社（八坂（祇園）・北野・上下御霊・今宮）の成り立ちについて明らかにしている。

「平安京が都市として確立し，人口も増加すると，そこで生活するための衛生環境の確保が重要な課題となってきた。劣悪な衛生環境の都市において，必然的に生じる問題は疫病の流行であった。とくに夏は，梅雨から台風の時期には大雨で鴨川が氾濫し，市街地を水浸しにすることも多く，放置されていた大量の汚物が市中に拡散される劣悪な衛生環境となったことが想定される。」（44頁）とあり，京都においては，都市衛生環境の確保のために，御霊信仰，天王信仰，さらにはそれらの諸社の設定まで行われていたことを紹介する。

平安期の人々は，疫病が流行する原因を怨霊の祟り，疫神の仕業とみなした。これらへの対策として催されたのが，御霊会という行事であった。「御霊会は怨霊や疫神がもたらす疫病などを避けるためのものであるから，それらが平安京の市街地に入ってくる手前でとどめて御霊会を催し，賑やかにもてなすことで外部に送り返さねばならない行事であった」がゆえに，「御霊会の多くが都市のはずれで行われた」（48頁）とする。

第4章では，平安後期以降における地域の守り神としての氏神の登場について説明する。

京都では，地縁共同体である町（両側町）を形成しているが，通の中央を氏子区域境界線が貫いているため，同じ町内の南北で氏神が異なるという特異な状況に置かれている。整然とした京都の氏子区域は，人為的に造られた側面のある可能性が高い，と指摘する。

著者が，萩原龍夫氏の論を引きながら説明するように，人為的に設定されたと想定される京都における氏子区域は，特定の祭りの執行費用を捻出する目的で一定の範囲の住民に何らかの役が課される空間の意である「祭礼敷地」の設定と，直接の繋がりを持つものと考えられる。京都における氏子区域は，自然発生的なものから，「祭礼敷地」が人為的・強制的に設定されてその確立をみたのではないか，と指摘する。

その確立期は，というと，15世紀において，足利義政は1436年に上御霊社の，足利義尚は1465年に今宮社の氏子区域内で出生しており，親子であっても氏神が異なっていたことが判明する。このことから，住民に氏子としての意識が確立したとみられる時期は，おおむね15世紀前半の室町期であったと推定する。

第5章では，葵祭（正式名称，賀茂祭，勅使奉幣）だけが，京都の主要祭礼のなかで，御旅所祭祀の形式をとっていないのはなぜか，という問いに対して，「上下両社および賀茂祭が，平安期以来，長らく国家（朝廷）や貴族層に支えられていたため，御旅所祭祀を担った民衆が祭に積極的に参加する余地が乏しかったこと，氏子区域が周辺の農村部に限定されていたことが挙げられよう。」（100頁）と述べている。その一方で，「賀茂祭に風流が凝らされたのは，それが当時の貴族層を主体として執り行われていたからとはいえない」（98頁）とし，京都では，12世紀頃には都市内部が

異なる産土神と祭りをもった小地域に分かれていたがゆえの，物見高い見物人の存在が「風流」を行わせていたとする。

第6章では，松尾祭と稲荷祭が取り上げられ，「平安京以前から鎮座していた土着の神といえる松尾・稲荷の両社は，平安後期にそれぞれ西寺・東寺と結びつき，対称形をなすように，七条を中心とする右京と左京の産土神になっていったのであろう。」(124頁）と指摘する。左京の七条大路は松尾祭の西七条を上回る繁栄をみせ，「平安後期の稲荷祭は，左京七条在住の一般民衆，とくに商工業者によって支えられていた。そして12世紀なかばごろより，これら富裕な者のなかから，多額の祭礼費用を負担する馬頭役（馬上役）が差定されるようになっていった」(118頁)。

第7章では，平安期から院政期における御霊会の祭礼内容の変遷が描かれている。貞観5年(863）五月の神泉苑御霊会では，仏教の法力で供養しようとした当初の御霊会の主旨が読み取れ，11世紀半ば以降になると，天皇や院，貴族等が風流にみちた渡物を祇園会に調進・奉納する記録が目立つ。馬長とは，造花などで美しく飾り立てた衣装を着，化粧をした稚児が，鳥の羽根のついた編藺笠をかむり，馬に乗るという行列風流であった。「神輿を中心に，馬長など風流を凝らした多くの渡物が都大路を練り歩く祇園会―それはまさに平安後期における都市祭礼文化の爛熟といえた。」(154頁）とする一方で，「『柱』や『散楽空車』のような独自の渡物を調進していたはずの民衆の動向が見えにくくなっている」(153頁）と指摘している。

第8章・第9章では，中世から戦国期・安土桃山期までの祇園祭における祭礼内容とその担い手の変遷が，主に河内将芳氏の先行研究に沿って述べられる。

14世紀における祇園社が日吉社の末社であり，中世の祇園会執行は，山門大衆の意向に強く左右されていたことを指摘する。そして「大山崎油座」の奉納した定鉾，「北畠笠鷺桙」「大舎人鉾」など，調進主体の多くが，当時の同業者組合（座）であり，「室町期までの祇園会には，下京の民衆が出した鉾，山だけでなく，さまざまな信仰者集団から多様な渡物が調進されていた」(188頁）とする。その一方で，章の最後では，祇園祭の祭礼内容は，貴族層によって調進・奉納されていた「馬長」から，南北朝から室町期においては「鉾」になり，それは「いずれも一般民衆が担い手になっていた」(193頁）とまとめている。この章の最後では，室町幕府が，各祭礼に積極的な後援をしていたらしいことが明らかになりつつある日本史学における最近の研究動向を示されているところが目を引く。

続く第9章では，応仁の乱前に出されていた「山崎の定桙」「北畠笠鷺桙」「大舎人桙」といった同業者集団による鉾が消滅し，16世紀に入るとすべての山鉾が下京の「町人ら」によって出されるようになった点を注目する。天文2年（1533)，下京66町の月行事（月交代の町の役人）らが祇園社にやってきて，「神事これなくとも，山ホコ渡したき」という申し入れをした。当時の下京では，地縁共同体である「町」が築かれ，町人は町を通じて祇園会に山や鉾を調進・奉納し，それゆえに山鉾巡行を自分たちの祭りと考えていたことなどが明らかになる。

終章では，①千年以上の長きにわたり，都市のなかで育まれてきた祭りを有する，②都市内部が小地域に分かれて別々の神社を氏神と信仰してきたため，神々への信仰や祭りをめぐる文化が多彩なものになっている＝氏子区域ごとに異なる氏神を信仰し，固有の祭りを執り行ってきた，③地方との深い結びつきを有している，という京都における神社と祭り，およびその特徴がまとめられている。

以下は，本書においてさらに議論を深める余地があると思われる2つの課題点について整理したい。

まず，「神社と祭礼からみた京都と地方との深い結びつき」であるが，著者が「中央」の意としての「京都」から地方への文化伝播を述べているのか，そして，その文化伝播が顕著に現れた時期はいつごろであったのかが，本書からは判然としない。さらに，滋賀県大津市の大津祭，三重県伊賀市の上野天神祭も「地方の祇園祭」(199頁）と紹介されているが，両祭礼とも元来秋祭りであり，祭神も異なる。現行の祭礼内容が京都祇園祭の山鉾および祇園囃子に類似したものであるのを以て「地方の祇園祭」と称するのには疑問が残り，また，その祭礼内容が取り入れられた時期と

経緯をこそ問わなければ，「京都と地方との深い結びつき」を明らかにはできないであろう。

次に，本書において取り上げた9つの神社とその祭礼を，著者は，歴史が平安期まで遡るということと，多くの京都在住の人々に支えられてきたという2つの意味で共通項がある，としているが，神社とその祭礼をどのように「支えた人々」に注目するのか，第1章において定義づける必要があったであろう。本書中には「住民」「都市住民」「一般民衆」「信仰者集団」など，祭礼を「支えた」人間集団について異なる呼称が登場しているため，それぞれ，意図的に使い分けがなされているのかどうなのか，読者に混乱を与えてしまうことになりかねない。著者が述べられているところの「住民」とは，天皇や貴族，足利将軍らを含めた概念なのか，また「信仰者集団」と「一般民衆」では，その用語が指し示す人間集団は異なるのかといった著者なりの立場の表明が，不可欠ではなかったかと強く感じた。

著者の想定する神社とその祭りを「支えた人々」は，祭りを「物見」する観客・見物人を含むものであることが判る（99頁）。しかしながら，そうなると第5章のように，「賀茂祭に風流が凝らされたのは，それが当時の貴族層を主体として執り行われていたからとはいえない」（98頁）としながら，「上下両社および賀茂祭が，平安期以来，長らく国家（朝廷）や貴族層に支えられていたため，御旅所祭祀を担った民衆が祭に積極的に参加する余地が乏しかった」（100頁）という曖昧な結論になりかねない。とくに京都のような，歴史の長い都市祭礼を歴史地理学として実証的かつ通時的に検討する場合，「祭りの担い手」をいかに捉えるのかといった著者自身の立場の表明なしには，発見したい画期が明確に見えてこない。「住民」が長らく継承してきた，というはっきりとした輪郭を持たない結論に陥る危険性が高くなってしまう。

そこで評者は，京都の神社およびその祭礼を経済の面で「支えた人々」に焦点を当ててその変化を追うことが，まずは必要ではないかと考える。第3章において「都市への疫神侵入を防ぎ止めるための行事が常設の神社にまで発展し現在まで存続している確実な事例は，平安京の御霊会以外にはない。平安期の御霊信仰ないし天王信仰が，いかに平安京の都市住民に深く浸透していたかを示すものといえよう。」（50頁）とされているが，一足飛びに平安京の都市住民による信仰心を指摘する前に，国家的事業として神社が造営され，鎮護国家の思想のもと，その祭礼が執り行われていたと導くのが，堅実で素直な史実の読み取り方ではないだろうか。平安期の国家的祭祀としての色彩の強さを特徴づけたうえではじめて，京都における御霊・天王系祭礼の担い手とその内容が貴族による馬長へ，そして都市住民による鉾へ，と移行していく過程を明確にし得ると考える。

また，第4章において紹介された，「祭礼敷地」が設定され，住民たちに祭礼課役が賦課されていくことが「氏子区域の成立に直接のつながりをもつ」とする萩原龍夫氏の見解は重要である。著者が明らかにされた京都の氏子区域も，通の中央を氏子区域境界線が貫いており，これらがまさに人為的，政策的に設定されたことを示している。

たとえわずかであっても，神社とその祭礼に何らかの役割を受け持たされることは，その氏子意識の醸成と直結している。本書の註記が充実していたおかげで，評者は史料にあたり，小さな発見することができた。

『日本三代実録』[1] の貞観7年（865）五月十三日条には，「延二僧四口於神泉苑一。読二般若心経一。又僧六口。七條大路衢。分二配朱雀道東西一。朝夕二時読二般若心経一。夜令下二佐比寺僧恵照一。修二疫神祭一以防中灾疫上。預仰二左右京職一。令二下東西九箇條男女一人別輸二一銭一。以充中僧布施供養上。欲レ令下二京邑人民一頼二功徳一免中天行上也。」とあり，疫神を鎮めるための疫神祭が，僧侶による般若心経の読経という内容を以て，神泉苑および七条大路の東西においてそれぞれ執行された。その際，朝廷は僧への布施として左京右京の男女に人別として一律一銭を課役し，功徳を頼み，季節の流行病を抑えようとしていたことが判る。このように，朝廷は疫神祭において9世紀半ばより「東西九箇條男女」「京邑人民」に経済的役割を担わせていた事実が判明する。同年六月十四日条には「是日。禁下京畿七道諸人寄二事御霊會一。私聚二徒衆一。走馬騎射上。小児聚戯。不レ在二制限一。」とみえ，御霊会に私的に集まり，走馬や騎射をすることを禁ずるが，子どもたちが集まり戯れるのはその限りではないとしている。やはり，経済的関

与の有無は，その祭礼への参加や氏子意識の醸成に大きく影響するものと判断される。そして，為政者が「京邑人民」に課役させたのが，葵祭や石清水八幡宮祭礼ではなく，御霊・天王系祭礼においてであったことは，後世のこれらの祭礼内容とその担い手の変化の著しさを追究するうえでも特筆すべきことであろう。第3章において「当初の御霊神・天王神系の神社がどのような人々によって維持されていたのか，よくわからない部分も残っているが，氏族や貴賤の枠組みを越えて，多くの平安京都市住民の信仰を集めていったことはまちがいないであろう。」(47頁）とされている部分の実証に役立てられよう。

後世まで国家的祭礼の側面が強く継承された葵祭など，平安京以前から鎮座していた古い神社の祭りと，平安期には主に国家による主導と負担で祭礼が行われていたものの，次第に貴族へ，そして「神人」「土倉」，「祭礼敷地」の氏子区域の人々へと，経済的担い手の変化が著しかった御霊・天王系の祭りという2系統が，京都には存在したといえるのではないだろうか。

一見，一般民衆の手による祭りのようにみえるけれども，実のところ為政者や国家の意向を強く受け，それらとの関係性の中で変化あるいは不変という祭礼内容の選択がなされてきた例が近年判ってきた。この視点に立って本書を読むと，祭礼内容とその担い手の特徴およびその変化から，京都市中の諸所に存在する各氏子区域における地域社会の形成とその成熟，およびそれらの時期の違いが，凹凸を帯びて見えてくるのではないだろうか。

（渡辺康代）

〔注〕

1）黒板勝美編『日本三代実録（新訂増補国史大系４）』吉川弘文館，1966年。